

日独感情用語とその分類についての 一試論

本 間 栄 男

キーワード：感情, Gefühl, Gemütsbewegung (Gemütsbewegung),
Affekt (Affect), Leidenschaft

- 第1節 本論文における「感情」の使用法
- 第2節 感情用語の整理
 - 第2節第1項 感情品目
 - 第2節第2項 感情の族
- 第3節 日本語の「感情」
 - 第3節第1項 日本語の「感情」の歴史
 - 第3節第2項 日本感情心理学会の「感情」
- 第4節 ドイツ語圏での感情用語
 - 第4節第1項 EmotionalitätとGefühl
 - 第4節第2項 18世紀ドイツ語圏での感情用語：
Gemütsbewegung
 - 第4節第3項 GemütsbewegungからGefühlへ
- 第5節 カントと感情用語
 - 第5節第1項 カントと感情
 - 第5節第2項 ソレンセンの感情分類
 - 第5節第3項 デイームリンクの感情分類
 - 第5節第4項 カントとGefühl

第6節 19世紀の感情用語

第6節第1項 19世紀初頭のドイツ語感情用語の構造

第6節第2項 19世紀後半の日独感情族用語の対応

第7節 まとめ

本論文は、19世紀前半のドイツ語圏における感情用語を整理してなるべく適切な日本語に対応させることを目的とする。

私は19世紀中葉のブリテン島における感情論についてアレグザンダ・ベイン (Alexander Bain, 1818-1903) とハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) を代表として論じてきた (本間2013a; 本間2013b; 本間2015a; 本間2015b)。次のステップとして彼らのほぼ同時代のドイツ語圏における感情論としてヴィルヘルム・ヴント (Wilhelm Wundt, 1832-1920) の感情論を取り上げる予定である。その前段階としてまず、感情にまつわる用語を整理したい、というのが本論文の目的である。この整理を必要とする理由は、私がドイツ語に詳しくないことと、日本語への翻訳での気ままな用語使用による混乱をできるだけ前もって排除しておきたかったからである。

第1節 本論文における「感情」の使用方法

まず、予備的なことからはじめよう。

ここまで使ってきた「感情」という用語の使用法を明確にする。それは「感情」という用語の意味を明確に定義することではない。それはあまり生産的なことではない。驚くべきことではないのだが、心理学では直接の研究対象ではないかなり抽象度の高い概念を示す用語には研究者全員で (少なくとも通常の心理学の研究者全員で) 合意できるような定義が示されない (心、意識、といった用語など)。各種心理学辞典にはそれらしいものがあるが、あまりに抽象的すぎたり、誰もが無視したりと規範として実を伴っていない。だからといって心理学の門外漢である私がここで何か改めて定義をしたところで混乱を増すばかりなので、行うべきではないだろう。だからと

いて、全く曖昧なままに済ますわけにもいかない。

なので、本論文では「感情」という用語を、日本語を母語とする私が今日その言葉で思い浮かべるようなふんわりぼんやりと漠然としたそれっぽくて必ずしも専門的な限定をされていないものを全て包み込むラベルとして超歴史的に使用する、あるいは歴史分析の道具として使用する。さらに、日本語だけでなく、英語やドイツ語での〈そのようなもの全体〉に言及する際にもこの「感情」という用語を使用する。もちろん、それに対応する英語やドイツ語の単語もあるのだろうが、本論文は日本語で書かれているので「感情」をまずは使用する。もちろん、時代や地域、そして学問的専門領域によって「感情」が含むものは異なっていることは十分に承知している。思想史研究は、こうなのではないか、と思って読んでみるとどうやら違ったようだ、という違和感から始まるのであり、その違和感が現在の我々を逆照射するところに面白さがある。

私には「感情」という用語自体に、特にこだわりも思い入れもない。ただ、今日最も一般的に使用される〈そのようなもの全体〉を指す用語だと私が考えているから、使用しただけである。もっと適切な用語があればそれを使用することになるだろう。日本には1992年に設立された日本感情心理学会が存在している¹⁾。それだけでなく、「情動」学を冠する学会もある²⁾。もっと日常的な、子供でも使用するような言葉としては「気持」もある（「気持学会」は存在しないようだが）。それでも本論文では、「感情」という用語に漠然とした全体をまかせてみたい。この漠然とした〈そのようなもの全体〉を指す用語を包括語としよう。「感情」は〈そのようなもの全体〉の包括語だ。そのため、以下では感情に特にカッコを付けることなく使用する。以下でカッコ付き感情の場合は、何か特別な意味があると理解されたい。

1) <http://jsre.wdc-jp.com/>。以下、URLに関してはすべて2017年10月末の確認。

2) 日本情動学会。<http://www.emotion.umin.jp/>。この学会でいう「情動学」はemotionologyという造語に対応されている。

まず、日本語における感情という用語とその使用について概観する前に、感情を巡る用語の大まかな整理を行ってみよう。こうすることでより議論がわかりやすくなるだろう。

第2節 感情用語の整理

第2節第1項 感情品目

前節でまずは感情を設えた。この中にある幾多の用語を区分していこう。ここで感情に関する用語を大きく2つに分ける必要がある。それは品目と族だ³⁾。感情の品目とは、生物分類で言う種の名称（「ホモ・サピエンス」、「Ailuropoda melanoleuca」）、科の名称（「ヒト」科、「クマ」科）、目の名称（「サル」目、「肉食」目）等々に相当する。感情の族とは、生物分類で言う界・門・綱・目・科・族・属・種という名称に相当する。

感情の品目は、いわゆる感情の種類に相当する。「あなたは今どのような感情を抱えていますか？」と問われた時の答えであり、「怒り」「悲しみ」「喜び」等々のことである。これらの品目は、「怒り」と「喜び」のように、互いに異なる（と通常考えられることが多い）場合もあるし、「怒り」と「激怒」、「喜び」と「歓喜」のように、似たようなグループに含まれるが差異がありそうな場合もある。前者の場合は特に問題は無いように思えるので、後者の場合を考察してみよう。この時、より包括的な用語とより特殊的な用語がある。「怒り」「喜び」はより包括的で、「激怒」「歓喜」はより特殊のあるいはより強度が高いと言える。激怒する人を見て「あの人は怒っている」と言えるが、怒っている人全てが激怒しているとは限らない（「イラっとする」「ムカっとする」は怒っているのだが、激怒とは言えないだろう）。生物学との類比で言えば、カブトムシとヘラクレスオオカブトムシの関係、イヌとチワワの関係だ。生物分類との類比で言えば、属と種、綱と目のよう

3) 英語にするならrepertoryとclass。

な関係だ。この包含関係の頂点に立つものが、生物分類で言う界kingdomに相当する感情品目である。この界に相当する感情品目がそもそも存在するのか、いくつあるか、それらはどのように分類される（べき）か、そしてそれらが人類普遍的か、という点は現代でも感情論の主要な論題となっている。この話題はどんな感情についての著作でも取り上げられている。だが、本論文ではそこには踏み込まない。

生物においても、例えばアフリカを出たホモ・サピエンスがネアンデルタール人やデニソワ人と混血していたり⁴⁾、多くの動物で種を超えた遺伝子交換が行われている実例があるように⁵⁾、異なる感情品目が同時に併存し混じり合うこともありうる（例えば「母の一周忌に父が連れてきた再婚相手の女性が私の産みの親であったと聞かされた時の気持」はとても一種類の感情品目では表せないだろう）。むしろ混じり合っている方が普通だ。この「混じり合い」が、もともとは複数の別個の品目が同時併存する（絵の具を混ぜる際のように）のか、異なる品目が時間的に短い間隔で切り替わっている（コンピュータのタスクスワップのように）のか、それともまた別のやり方であるのかについては本論文では（私の能力の限界から）扱えない。

或る具体的な感情品目を〈単純〉と見なすか、何らかの複数の品目の〈複合〉と見なすかは、個人によって、文化によって、さらには言語表現によって異なる場合がある。よく挙げられる例としては、或る文化には一単語で表せる（その意味で単純と見なせる）感情品目が、他の文化には相当する単語が無く、説明する文の形で定義して示す他無いということがある。ドイツ語のSchadenfreudeがそうであり（この単語自体はSchaden = 損害とFreude =

4) スヴァンテ・ペーボ（野中香方子訳）『ネアンデルタール人は私たちと交配した』（文藝春秋2015）。デニソワとはロシアの地名で、そこで発見された現存しない人類をデニソワ人という。ただし、デニソワ人の遺伝子を受け継ぐのは東南アジアからオセアニアにかけての原住民であり、そのため、かつてデニソワ人がその地域にも住んでいたと推測される。

5) 例えば、小原嘉明『進化を飛躍させる新しい主役 モンシロチョウの世界から』（岩波書店2012）。

喜びの複合語であるが)、日本語のモットイナイもそうかもしれない⁶⁾。ギリゴリの文化人類学的相対主義者なら、このことが我々人類に普遍的感情品目が無いことの証拠と考えるかもしれない。けれども、Schadenfreudeとは何かを日本語を母語とする日本人である私は理解し(私の理解した限りで)感じることもできるし、全く日本文化の背景を持たなかったケニア人女性にもモットイナイは理解できた⁷⁾。この場合、問題は言語の不備であろう。Schadenfreudeも必要なら「シャプる」という用語を作って日本語と日本文化に流布させ(うまくいけば)定着させることも可能だろう。ただし、言語の不備を改善できるとしたら、それは将来の話である。過去は修正も改善もできない。そのため、歴史文献で出てくる感情品目用語はきわめて注意深く扱う必要がある。すなわち、18世紀の「悲しい」が21世紀初頭の我々、あるいは私個人の「悲しい」と全く同じであると軽々しく決定することは避けなければならない。もちろんこれは思想史研究一般に言えることであって感情のことにのみ言えるわけではないのだが。

第2節第2項 感情の族

もう1つ、感情の族について考察する。感情という最も包括的なものの中に放り込まれた用語に、より少なく包括的であるが、個々の感情品目を表すのではない用語がある。具体的には狭い意味での〈感情〉、情動、気持があ

-
- 6) 両方の例は以下に見出せる：エラ・フランシス・サンダース(前田まゆみ訳)『翻訳できない世界のことば』(創元社2016)。愉快な本である。後に出てくるシタールフォルトの挙げた例は、チェコ出身の作家ミラン・クンデラ(Milan Kundera, 1929-)によるチェコ語の感情品目litostだ(Stalfort 2013, 70-80)。クンデラはこの語のために短編小説を描いた(それをここで説明することはできない)。チェコ語を説明するフランス語で書かれた小説(私はこれをドイツ語に訳されたもので初めて読んだ)の日本語訳では、この語はカタカナで「リートスト」と書かれる：ミラン・クンデラ(西永良成訳)『笑いと忘却の書』(東京：集英社2013), 195-257。
- 7) ワンガリ・マータイ(Wangari Maathai, 1940-2011)にはアメリカ留学経験があり、異文化理解に必要な体験を得ていたという事情はある：ワンガリ・マータイ(小池百合子訳)『へこたれない ワンガリ・マータイ自伝』(小学館 2017)。

る。他にも、情操、情念、情感、気分、感性、心情、感傷、情緒など、類語辞典を使えば取り出すことができるだろう。本論文では、このような日常的な用語の用法ではなく、科学的あるいは学問的な領域での感情族の整理を目的とする。その前にまず、日本語の「感情」という言葉の来歴を簡単に振り返ろう。

第3節 日本語の「感情」

第3節第1項 日本語の「感情」の歴史

そもそも、「感情」という日本語は日本生まれである。本節は（当時）群馬大学教養部倫理学教室にいた吉野寛治の研究「ことばとしての感情」に従って概説する（吉野 1975）。吉野によれば、近代以前の中国の文献に「感情」が出てきても、「情」を「感」という動詞句であって、名詞の熟語ではないという⁸⁾。「感情」が熟語名詞として使われたのは日本のいずれも8世紀に成立した『万葉集』の注釈と『日本書紀』での合計3つの使用が最初だった。そこでの「感情」は男女の恋愛感情のことを指していた。その際に読み方も「カンジョウ」ではなく「カンセイ」と発音され、江戸時代までは「カンセイ」が主流だった。吉野は「情の内容は……激しい動揺, Passion, Leidenschaft……当事者にはPathosである」と言う（吉野 1975, 28）。千年後のドイツ語ならばAffektに相当するだろう（本論文第6節参照）。この「情愛であり欲情でありパトスである」感情が「『しみじみとした感動の気持ち』『感興』」へと時が経つにつれて変化していく（激しい感情という意味も残しているが：吉野 1975, 33）。

明治以降「感情」は「カンジョウ」になり、翻訳語として使われることに

8) この「感」だけで「心を動かす」という意味があるので、「感情」の原義は本論文第7節で扱うドイツ語のGemütsbewegungに意外なほど近い。また、英語のemotionもフランス語émotionからの借入語としてやって来た当初は「身体の動き」だったものが、「心の動き」に拡張されたのだという（Dixon 2012）。とすると、emotionとの親近性もある。

なる。吉野が作った表三に江戸時代から明治初期にかけての英和辞典などにおける代表的な感情族用語 (emotion, passion, feeling, sentiment, pathos), および蘭仏独の感情族用語に対応する日本語がまとめられている (吉野 1975, 38-40)。まずemotionは騒動・感動 (motionにひばられたのだろう) が多く, 情緒・感情も1例ずつ見られた。次にpassionは情または欲情である。さらにfeelingは初期は知覚・感触という触覚的なイメージが先行するが, ベインの心理学書の抄訳者であった井上哲次郎 (1856-1944) の『哲学字彙』(1881)以降感情族用語である「感情」「感応」が主になっていく。最後にsentimentは感覚と考へ (存寄=ぞんじより) とされ, 井上哲次郎は「情操」を与える (pathosは略)。

この表から解ることは, 「感情」という日本語が徐々に英語feelingの訳語に収斂していくという傾向だ。井上哲次郎が与えた「感応」は定着しなかった (仏教用語に同じものがあったからかもしれない)。英語feelingに対応する日本語として私は以前の論文で「感じ」というとても据わりの悪い言葉を用いたが, その理由はemotionの方に「感情」を割り振ってしまったからであった (本間 2013a)。19世紀中葉, ベインの『Emotionと意志』初版 (1859) までのemotionの用法は上述のような包括的ラベルとしての感情を当てることは適切だった⁹⁾。20世紀末に感情が脳科学の分野で再評価されるきっかけとなったポルトガル出身のアメリカの神経科学者アントニオ・R. ダマシオ (Antonio R. Damasio, 1944-) は明確に客観的なemotionと主観的なfeelingの区別を付けているし, 田中三彦 (1943-) による翻訳もemotionを「情動」, feelingを「感情」と訳し分けている (ダマシオ 2010)¹⁰⁾。

9) 英語のemotionの登場に関してはディクソンの著作と論文を参照 (Dixon 2003; Dixon 2012)。Dixonによれば, 19世紀初頭のエディンバラで英語での従来の宗教的・道徳的な感情族用語passionやaffectionを避けて, 世俗的で中立的なemotionが包括語として導入されたという。

10) ダマシオはその後もその区別を厳守し, 最新の著作でも保持していて, 翻訳も (訳者が異なっているにもかかわらず) その区別を受け継いでいる (ダマシオ 2013)。もし読むのだったら最新の著作だけでよい。

第3節第2項 日本感情心理学会の「感情」

上述のように、日本感情心理学会という学会がある。『感情心理学研究』という学術雑誌を刊行している¹¹⁾。英語による学会名Japan Society for Reserch on Emotionsと比較すれば、日本語での学会名に含まれる「感情」は英語のemotionsに対応していることがわかる。ここでemotionsが複数形であるのは、この単語で感情品目を想定していたからだろう。

『感情心理学研究』第1号巻頭に当時の日本感情心理学会会長で心理学者の松山義則（1924-2014）による「感情心理学研究の刊行を迎えて」という序文がよせられている。そこで松山はこう言う：

喜び、悲しみ、怒り、恐れなどのあらわな感情をわれわれはもっとも多く研究対象にしますが、これについてはすでにご熟知のように、専門用語としては、情動、情緒と名づけられています。それ故に、本学界の名称は、本来、日本情動心理学会であり、また研究誌名は情動心理学研究か情緒心理研究とすべきでありましょう。しかし、情動（Emotion）はまだ、日本の言葉としては一般になじまないように思えます。これに比べますと、情緒は膾炙^{マツ}した言葉となっていますが、なお心理学的な現象をさし示すには不十分の感がまぬがれないと考えます。（松山 1993-1994, 2）

「喜び、悲しみ、怒り、恐れ」は感情品目だ。そしてそれらをまとめる感情族「情動、情緒」が専門用語として熟知されていた、と言うのである。なのでそれを学会名にすべきところを一般への浸透度を配慮して「感情」に落ち着けた。さらに、いずれは「感情」を「情動」「情緒」に取り替えること

11) 日本感情心理学会は2015年からもう1つの学術雑誌『エモーション・スタディーズ』を刊行している。両雑誌ともJ-Stageにおいてバックナンバーが閲覧可能である (<https://www.jstage.jst.go.jp/>)。

になるかもしれないと言う（松山 1993-1994, 2）。松山はその後 20 年間存命であったが、その間に名称の変更はなかったし、結局 2017 年の今日も「感情」のままである。松山没後の追悼を兼ねた「感情心理学会設立秘話」で、著者である心理学者の鈴木直人（1947- ）は、「感情」という用語の選択について学会の創設メンバーの間で若干の見解の相違があったことを報告している。戸田正直（1924-2006）が「情動」を嫌い、大山正（1928- ）が「情動」を残そうとしたのだという（鈴木 2015, 151）。いずれにしても、1990 年代初頭の日本の心理学では感情に対して「情動」や「情緒」という用語を学問的文脈で使用していたことがわかる。

松山の著作・翻訳書のタイトルでは情動より感情が多い（2対2）¹²⁾が、CiNiiに表示される限りの論文ではイーゼンになる（4対4）。松山が属していた同志社大学での講義名は「感情心理学」である¹³⁾。松山は一般的には「感情」という用語の方が通りが良いと考えていたのだろう。大山正は知覚心理学が専門で、そちらの方から感情に関心を持ったと思われる。学会設立以前にはあまり感情に関する研究がない。おそらく松山同様に、当時の心理学の専門用語であった「情動」を使用することをまず考えたのだろう。その後の研究では「感情」という用語を使用している。むしろ「情動」を含むタイトルの論文が無い。戸田正直は感情に関するアージ（urge）理論の提唱者である。日本語の著作では一貫して「感情」を用いていた。

12) ここには『感情心理学』（誠信書房 1974-1978）という全 6 巻になる予定だったが未完に終わったシリーズ 4 冊がまとめて 1 とカウントされている。それをバラバラに数えれば感情へのポイントは実質 5 となる。そのため、感情が多い、ということになる。ただし、その『感情心理学』シリーズの第 1 巻目のサブタイトルは『感情と情動』である。

13) 同志社大学心理学部の 2014 年以降のカリキュラムによる (<http://www.doshisha.ac.jp/academics/undergrad/psychology/curriculum.html>)。松山が「感情心理学」の講義を始めたようだが、いつからかは不明。『同志社大学心理学研究室六十年史』は 1989 年に出版され、1988 年のカリキュラムまで掲載されているが、そこには「感情心理学」の科目はない。開講されたのはそれ以降と考えられるが、いつからかは調べられなかった。

第4節 ドイツ語圏での感情用語

第4節第1項 EmotionalitätとGefühl

さて、以上で感情品目と感情族という区別についてはいくらか明確になったと思われる。以下では、これが18世紀末から19世紀前半のドイツ語圏でどのような状態であったのかを検討したい。ドイツ語を扱うため、以下では欧文と邦文が混じり合うことになり大変見苦しいとは思いますがご寛恕いただきたい。

ドイツ語圏の感情用語に関する漠然とした知識も無かった私にとって幸運だったのは、この数年で2冊の重要な研究書が現れたことであった。1つはJutta Stalfortによる*Die Erfindung der Gefühl: Eine Studie über den historischen Wandel menschlicher Emotionalität (1750–1850)* (2013)、もう1つはUte Frevertらによる*Emotional Lexicons* (2014)である (Stalfort 2013; Frevert et al. 2014)。前者のユータ・シタールフォルトは¹⁴⁾、その著作『Gefühlの考案 人間の感情性の史的変遷についての一研究』で1750–1850年のドイツ語圏における感情についての用語とその概念の変遷を多数のドイツ語論文と著作を参照してドイツ語でまとめ上げた。一方ドイツの歴史家でマクス・プランク研究所の感情史センターのウーテ・フレーフェルト (1954–) らの『Emotion辞典』は1700–2000年頃のドイツ語の辞書・百科事典から感情に関する項目1万ほどをピックアップして調べたプロジェクトの参加者による論文集である。こちらはドイツのことについて英語で書か

14) この人物については著作では「哲学・歴史・政治学の領域で成人教育をしている哲学博士」としかわからない (Stalfort 2013, [iii])。この著作に対するフレーフェルトの書評によれば、シタールフォルトはMartin-Luther-Universität in Halleで歴史家のHans-Jürgen Pandel (1940–) の下で学位を得ているという。ただし年代は不明 (<http://www.hsozkult.de/publicationreview/id/rezbuecher-21450>)。H-Soz-u-Kultとはドイツ語圏のネット上での歴史学系専門書の書評サイトのようなもので、きちんとした歴史家が書いている。シタールフォルトの感情論は基本的に感情の社会構成主義に近い。その著作の前半は理論武装に当てられている。そして、かなり魅力ある議論を展開している。

れている。

本論文の目的のために、特にシタールフォルトの著作が有益である。これにそって18世紀末から19世紀前半のドイツ語での感情用語について見ていこう。その前に、まずこの著作の題名に現れる2つの感情用語について。まず、副題にあるEmotionalitätはドイツ語での感情研究に頻出する用語で、無理矢理英語にすればemotionalityに相当するのだろう。著者のシタールフォルトもこの語に関しては特に何の説明もなく使用している。Emotionalitätという単語自体はドイツ語にとっては外来語であるemotionを取り込んでドイツ語の抽象化の語尾を加えたもので、日本語で〈エモーション性〉などと言う時（ほとんど無いとは思いが）のぎこちなさに似た感じがあるのかもしれない。辞書的な意味は「感情的行動様式や表現形式」を意味する¹⁵⁾。英語のemotionalityは、客観的に観察しうる感情状態を指すので、ドイツ語のEmotionalitätがこの意味を引き継いでいることは明らかだ。ただ、歴史的に感情を研究する場合には、感情の何たるかを厳密に定めることなく漠然と感情に関わる物事を示す便利な用語になっている¹⁶⁾。要するに歴史分析のために便利な用語であって、少なくとも本論文で研究の対象とする過去の時代に存在した用語ではない。

もう1つのGefühlは、ゲルマン語に起源を持つ今日のドイツ語で最も普通に使われる感情を示す単語である。最も包括的な意味で、本論文での日本語の「感情」に対応するドイツ語として示すことができる。「今日のドイツ語で」という点が重要だ。というのも、シタールフォルトの著作の題名は『Gefühlの考案』だからである。Gefühlというものが今日見るようなものに仕立て上げられた時期があるのだ、というのがこの著作が明らかにしたことなのである。

15) <http://www.duden.de/rechtschreibung/Emotionalitaet>.

16) この意味で本論文の用語法では「感情性」という日本語に対応するだろうが、ドイツ語のEmotionを英語のemotionと同じように扱うとすることは、あまり適切ではないかもしれない。

第4節第2項 18世紀ドイツ語圏での感情用語：Gemütsbewegung

19世紀までのヨーロッパ世俗語で感情を扱った代表的な著作から感情族を表す用語を拾ってみよう。1649年にフランス語で出版されたオランダで活躍した哲学者ルネ・デカルト (René Descartes, 1596-1650) の『情念論』はpassionを用いた。18世紀スコットランドの哲学者デイヴィッド・ヒューム (David Hume, 1711-1776) の英語で書かれた『人間本性論』の第2巻が感情を扱い、サブタイトルはOf the Passionsである。ヒュームと同時代の哲学者アダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790) の英語で書かれた『道徳感情論』(道徳情操論と訳されることもあった) ではsentimentsだった(道徳的moralの語と結びつく時にはsentiment(s) が使用されることが多い)。この他にaffectionが英語やフランス語で使われていた。思想史家トマス・ディクスンが指摘したように、英語のemotionが包括語として使用されるようになったのは18世紀のスコットランドだった (Dixon 2003; Dixon 2012)。

ドイツにおいても、Passion, Affektといった感情族用語はそのまま使われていた¹⁷⁾。ただ、Passionの場合、それに相当する(場合が多い)ドイツ語Leidenschaftが使われることもあった。またNeigungも使用される。この単語は「傾向、性癖、好み」などと訳され、動詞のneigen(傾く)からの派生語である (Stalford 2013, 170)¹⁸⁾。時にはEmpfindenあるいはEmpfindungも(感覚、感覚することの意味)¹⁹⁾。

17) AffektあるいはAffectあるいはaffectionは吉野のリストをすりぬけた。今日でも定訳が無く、英語でも融通無碍に使用されている。本来は受動的なpassionに対応する能動的なaffectionであり、英語での「愛情」などの意味はここに由来する。カントが使うAffectの日本語訳では「興奮」(カント 15, 205)。現代のドイツ語ではAffektと表記するが、カントの場合Affectと表記する傾向がある (Williamson 2015, 2)。この論文ではkを使う方を標準とした。

18) カントの日本語訳では「傾向性」(カント 15, 205)。

19) EmpfindungとGefühlが異なることをはじめて明確に述べたのがカントだったらしい。感官によって捕らえられる外的事物の表象をEmpfindung、主観的なものに関わるのがGefühlだという。カントの例を使えば、草原の緑がEmpfindung、それを心地よいと思うのがGefühl (カント 8, 59-60)。ということは、それまでは混同されていたということだ。

これらの用語を含めて、18世紀のドイツ語圏で感情について最も包括的なラベルとなった単語はGemütsbewegungであった (Stalford 2013, 187-225)。この単語は今日ではあまり使用しないようである。たとえばGoogleでの検索件数を比較するとGemütsbewegungは約54500件 (18世紀当時の綴りであるGemüthsbewegungだと約56900件) であるのに対し、Gefühlは約50200000件と千倍近い (2017年10月末)。このGemütsbewegungという単語はGemütとBewegungの複合語である。後半のBewegungは、動詞bewegen (動かす) の派生語で、動き、運動を意味する名詞だ。惑星運動Planetenbewegung、振り子運動Pendelbewegung、眼球運動Augenbewegungなどのように、Bewegungの前に付く単語の示すものが動くことを表す。

ではGemütとは何か。Gefühlがfühlenという動詞に由来するように、mutenあるいはmütenという動詞に由来しそうなのだが、そうではない (mutenという動詞はあるが、少なくとも心的な何かとは関連しそうもない)。シタールフォルトによると、中高ドイツ語のmout/mutという語根から生じ、「何かを指向する・求める」を意味して、今日では派生語のvermuten (推測する)、anmuten (気分させる)、zumuten (過度に期待する)、mutig (勇気ある)、mutwillig (故意の)、übermütig (はしゃいだ)、demütig (へりくだった) などが生きていて、これらは心的な状態を表す語群となっている。つまり、Gemütはそれらを取りまとめたおおざっぱに「心」を意味する語だったのである (Stalford 2013, 195-196)²⁰⁾。

シタールフォルトはツェードラーを参照して、このGemütを類似概念であるSeeleと区別しながら解き明かす。このツェードラー (Johann Heinrich Zedler, 1706-1751) とは全63巻にも及ぶ『全学芸の大完全普遍辞典 (Grosses vollständiges Universal-Lexicon aller Wissenschaften und Künste)』を1731-1754年に刊行した人物で、この辞典は研究者にとってはこの時代のあ

20) 別のまとめとして：Scheer 2014, 44-51。

る程度の常識を教えてくれる便利な道具となっている²¹⁾。ともかく、Seeleは魂や靈魂に相当し、哲学上の概念であると同時に宗教的な意味合いも含む。Seeleが不死の存在で彼岸的であるとすれば、Gemütは此岸的、即ち現実社会の関係に開かれているので、社会からの影響によって傷つき、時には死ぬこともある(Stalford 2013, 196–197, 220–226)。つまりGemütsbewegung = 心の動揺は激しすぎると死に至る危険性を孕む。ならばどうするか。人々はなるべくこのGemütsbewegungを避けるべきだ、ということになる。そして求めるのは心の平穏だ。この考え方はストア派哲学の人生訓を思い起こさせる。これがツェードラーに代表される18世紀中頃までのドイツ知識人の理想であった。

感情族用語に戻ると、このGemütsbewegungの中で特に激しいものがLeidenschaftであり、ラテン語のadfectus (affectusに等しい)だ、とツェードラーは言う。ここではLeidenschaftはpassionではなかった。というのも、この場合、Gemütsbewegungは能動的だからである。心が動く、のであって、心を動かされる、ではない。受動的ではないのでpassionではない。反対にaffectは能動的な意味を持つ。ここでのLeidenschaftは、受動的な意味を必ずしも含まず、激しさを滲ませているのである(Stalford 2013, 198–200)。

第4節第3項 GemütsbewegungからGefühlへ

この状況が変化するのが18世紀後半だ、とシタールフォルトは考える。原因はイングランドの思想家ジョン・ロック(John Locke, 1632–1704)の思想のドイツ語圏への移入だ。ロックの『人間知性論』のドイツ語訳は1757年に出版された。ロックの人間観と新しい世界の観方が、ドイツの教

21) 以下のサイトで検索が可能：<https://www.zedler-lexikon.de/>。全体で項目は284000ほどあり、1頁2カラムで6万3千頁ほどになり、題名の過剰さは伊達ではない。この時代のドイツ語の本はフラクトゥールで印刷されているので初心者を読むのは容易ではない。この時代、GemütはGemüthと綴っていた。

養人たちの考え方を揺り動かした。特に感情論にとって重要な変化は、心が動揺することを避けるあまりに経験世界から目を背けるという旧来の態度に代わって、経験世界から学び取って人間が形成されていくというロックの経験論が経験世界を肯定する態度を導いたことであった。さらにロックの快不快に基づく感覚の価値付けが、快不快を心的動機として行動を促すように人間が設えられているという当時のドイツ人にとっては新しい考え方を吹き込んだ。つまり、人間は能動的であるべきだ、という思想である。これは心が動くことを良しとする発想に繋がる。すなわち、もはやGemütsbewegungは死に至る不幸ではなくなったのだ (Stalford 2013, 265-287)。

むしろ感情は人間の生活の重要な一要因となった。この契機は18世紀後半のドイツ語圏の哲学者テーテンス (Johannes Nikolaus Tetens, 1736-1807) に見出せる、とシタルフォルトは言う²²⁾。テーテンスは心的能力として知性と意志の他に感情能力Gefühlvermögenを加えた。重要なことは、テーテンスが外的感覚 (感覚器を通じて得られたもの、今日普通に言う感覚) と内的感覚 (身体感覚ではなく、個人の内部で生じる心的な感覚で、いわば感情) の区別を見出したことであった。前者がEmpfindungで後者がGefühlだ、ということになればわかりやすいのだが、まだEmpfindungもGefühlもほぼ同じ事を指す用語として使用されてしまっている。(Stalford 2013, 288-292)。

ここで、Gefühlのそれ以前の意味について、ミュンヘンのルードヴィヒ・マクシミリアンス大学の現象学者Verena Mayerの論文の助けを借りよう (Mayer 2012)。それによると18世紀初頭まではGefühlは〈触覚〉というのが主要な意味だった。それが〈手で触れること〉というだけでなく〈全身の触る・触られる感覚〉という意味での触覚、すなわち視覚が眼を、聴覚が耳

22) テーテンスはデンマーク生まれで、ドイツとデンマークで活躍したが、著作はドイツ語で発表されたので「ドイツ語圏」ということになる。日本ではカントとのからみで言及されることが多い。

を感覚器官とするように、いわば身体全体を感覚器官とする〈感覚〉へと拡張される。この意味でのGefühlの使用が1790年頃に下火になり、内的感覚としての〈感情〉に近いものラベルとして使用される(Mayer 2012, 291-306; Frevert 2014, 19)。ちなみに、前出のツェードラーの辞書にはGefühlの単独項目はなく、Fühlenの中に含まれる(Frevert 2014, 19)。

テーテンスに始まるこの内的なものの分析をより以上に展開したのがイマヌエル・カント(Immanuel Kant, 1724-1804)であった。カントについては十分な翻訳と研究の厚みがあり、後の時代への影響もあるので、感情用語を整えるために少し立ち止まってみよう。

第5節 カントと感情用語

第5節第1項 カントと感情

カントは感情とあまり関係ないように思われがちだ²³⁾。カント専門家の多くが〈そのような思い込みがある〉と切り出す。

だが、近年特にカントの感情論は注目を浴びているようだ。たとえばエディンバラ大学の哲学者Alix Cohenが編集した論文集*Kant on emotion and value*が2014年に出版され、アメリカのシラキュース大学などで教えているDiane Williamsonは*Kant's theory of emotion*という著作を2015年に刊行するなど、波が来ているようだ(Cohen (ed.) 2014; Williamson 2015)。前者の論文集では1人を除いて著者が女性であり、後者も女性研究者であって、このこととこの波が関係するのかわからない²⁴⁾。日本でもコンスタントに〈カントと感情〉に関する論文は書かれているようだが、最近急に盛り上がっているという体ではない(特に女性研究者が多いというよう

23) カントの著作に関しては新しい岩波書店版の日本語訳全集を参照する。参照する著作が含まれている全集の巻数とページ数で提示する。例えば『人間学』205ページは(カント 15, 205)というように。

24) 前出のMayerの論文の後半が主にカントの感情論である(Mayer 2012)。シター・ルフォルトも女性だ。感情史研究にジェンダー的な偏りがあるのかもしれない。

もなさそうだ²⁵⁾。

ともかく、カントの感情論のことをきちんと論じるためには、カントの使用する感情用語をきちんと定めておく必要がある、ということに研究者たちは比較的最近気がつき出したようだ。カントの感情用語、特に感情族用語について分類するための論文が少なくとも2つ出版されている。1つはアメリカのペンシルヴァニア州にあるアーサイナス大学の倫理学研究者Kelly Sorensenによる「カントの感情分類」と、クラーク大学の哲学史研究者Wiebke Diemlingによる「カントの実用的感情概念」である(Sorensen 2002; Diemling 2014)。本論文ではこれらの先行研究に依拠してカントの感情族用語を整理していこう。

似たようなテーマの論文が2つある理由は、それぞれがカバーする著作が異なることに由来する。ソレンセンの論文は『判断力批判』(1790)を中心に、ディームリンクの論文は『人間学』(1798)を中心に行っているのだ。時期的に早い著作を扱うソレンセンの方から見ていこう。

第5節第2項 ソレンセンの感情分類

まず前提。カントの著名な3批判書の大トリをつとめるのが『判断力批判』だ(カント8)。この著作の冒頭近くでカントは心的能力(Seelenvermögen)の分類を提示する。それは3分割になる。第1が認識能力(Erkenntnisvermögen)、第2が「快不快の感情(Gefühl der Lust und Unlust)」, 第3が欲求能力(Begehrungsvermögen)である(カント8, 23)。能力の分類とっておきながら感情(Gefühl)にだけ能力(vermögen)が付かないという不揃いが無性に気に障るがしかたがない²⁶⁾。

25) カントと感情というだけで、膨大な数の論文を見つけることができるので、ここでは特に列挙しない。CohenやWilliamsonの著作の文献表を参考されたい。

26) 著作ではそうだが、実際の講義の場面では「感情の能力」と言っていたらしい(カント19, 58)。ただし、講義ノートが正確にカントの発言を反映している、とは断言できないが。

ここからソレンセンの論文に入る。ソレンセンが「感情分類」を問題にするのは、カントが一貫した感情「理論」を持っていない、と考えるからだ(12年後にウィリアムズはカントの感情理論についての本を書くが)。その理由の1つが、カントが感情についての包括語を一貫して使用していないこと、にある。ソレンセンによると、英語のemotionに相当するカントのドイツ語の例としてGefühl, Affekt, Rührungがあるという。前2者には既に出会ったが、最後のものは初めて見た。Rührungがカントの英訳書でemotionとされることもあったという。牧野英二による日本語訳では「感動」だ。これは今日の独和辞書でも平均的な訳語選択である。ソレンセンもRührungは感情の下位族だと正しく認識している。もう1つの理由は、カントが感情についてのまとまった体系的記述を行っていないことにある。Gefühlが語られるのは欲求との関連においてのみである(なので、感情についての固有の理論が無い、というソレンセンの主張に至る)。ただし、カントの使用する感情用語には一貫性があり、特に道徳に対する感情の重要性は否定できない。第1の理由で包括語の選定に揺らぎがあるということだが、下位の感情族用語の関係はしっかりしている、というのだ。下位の感情族用語としてソレンセンが例に挙げるのが、Neigungen, Affekten, Leidenschaften, Begierdenである(全て複数形)。前3者は既出だが、最後のものは牧野訳では「欲求」とされる。前出の「欲求(Begehrung)」との違いは不鮮明で、ドイツ語自体も似ているし、英語訳ではどちらもdesireで、日本語でも同じ「欲求」だ。ただ、役割としてはBegehrungがより包括的で上位、Begierde(単数形)がその下位を示す族名ということになるらしい。

ソレンセンによる分類に立ち入ろう。ソレンセンは欲求(Begehrungの方)とGefühlを一緒に扱っているが、ここではGefühlの方だけに注目する。Gefühlには大きく2つの族があり、一方には感情品目として尊敬(Achtung)や道徳感覚が含まれるソレンセンが族名を与えていない族、も

う一方は族名が感動（Rührung）でその中にAffektが入る（図1）。これは批判期の道徳に関連して見たカントの感情論の図式である。

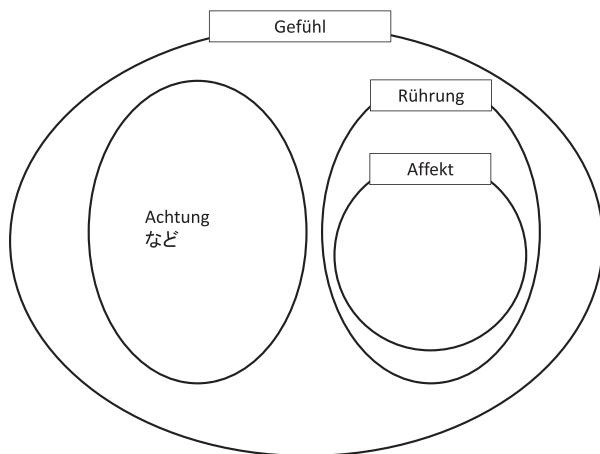


図1 ソレンセンの感情族分類（Sorensen 2002, 118 を変更）

第5節第3項 ディームリンクの感情分類

これに対しディームリンクの論文は『人間学』での感情の分類を論じる。ディームリンク自身は「affective states」を包括語とする。その上で、複数の感情用語になるべくカントに即した定義を与えている（Diemling 2014, 110）。そこで挙げられるのは6つの感情族用語はfeeling, desire, affect, instinct, inclination, passionである。ディームリンクは挙げていないが、それぞれはおそらくドイツ語のGefühl, Begehrung, Affekt, Instinkt, Neigung, Leidenschaftに対応するのだろう。既にお馴染みのものだが、Instinktだけが新顔だ。もちろん「本能」という日本語に対応する。今日の日本文化の感覚では、本能を感情族に数えるのには無理があるだろう。そんなことを言えば、desireもあやしいということになるが、これはあくまでディームリンクの考える「affective states」の範囲であり、より詳しく言えば、カント『人間論』の「欲求能力について」という部分の記述を主

に元になっているので、欲求の要素が入っているのは仕方がない。

ともかく、ディームリンクの言う「affective states」は大きくfeelingとdesireに二分され、feelingは純粋な意味でのfeelingとaffectに、desireはinstinctとinclinationとpassionに下位分類される（図2）。枝分かれ風の図示であるが、より正確を期せば、desiresの枝からinstinctsとinclinationsが分かれinclinationsからpassionsが分岐する、とした方がよりカントのテキストには合致する。

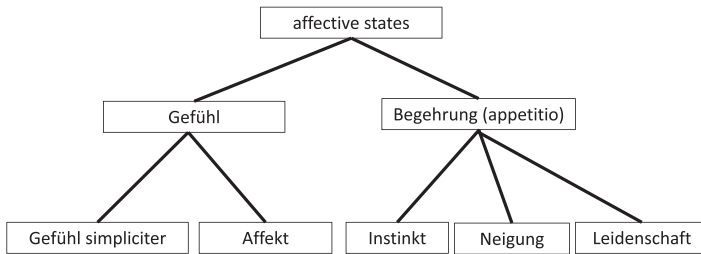


図2 ディームリンクの感情族分類（Diemling 2014, 110 を変更）

第5節第4項 カントとGefühl

ソレンセンとディームリンクの両者の図式に明白なのは、欲求と感情の区分けであった。再びシタルフォルトの言葉を聴こう。カントによって明確に、欲求と感情が切り離され、下位分類としてAffektとLeidenschaftの明確な差異化が行われた。AffektはGefühlの一部で、LeidenschaftはBegehrungの一部だ。カントは感情品目ÄngerとHassの例を出す。日本語では「怒り」と「憎悪」に相当するだろうか。前者はAffekt、後者はLeidenschaftに属する。違いは、前者は一過性で制御可能（カッとなって何かするが、すぐに醒める）、後者は長く人間を捕らえ束縛する（憎悪に駆られた行動を行いたい、という欲求を抱かせる、だから欲求の中に入る）という（Stalford 2013, 301-302; Scheer 2014, 51-54）。

Leidenschaftと区別・対比されることでAffektは、21世紀初頭で言う

emotion（情動）に近づいた。瞬間的で制御不能だがすぐに消え去る、あるいは消すことができるもの、とえばダマシオの言うemotionに近い。驚いたことにカントは、このAffektが身体活動で制御できるとすら主張する。怒って怒鳴り込んできた人間（この人物は今Affektに囚われている）を座らせることができれば、その時点で怒りはいくらか静まっている、というのである（カント 15, 205；Diemling 2014, 112–113, 117–118）²⁷⁾。身体活動こそがemotionだ、というダマシオまであと一歩ではないか。ともかく LeidenschaftとAffektの分離は、Gefühlから暗い情念を欲求能力に押しつけ、感情のポジティブな面を強調することに至る（Stalford 2013, 304–305）。

カントはこの世の快を受け入れる道を開いた。まだかなり抑制的ではあったものの（Stalford 2013, 308–310）。カントの次の世代はこの世のことについて感情を抱くことを恐れず、歓迎する。「なので感情の発見は情動経験において新しい次元を開いた：教養人は新しい語彙〔感情語〕の助けでこの世が作り出しうる感覚との快適なつきあいを学んだ。彼らはだんだんこの世の一部として自らを考え、その美に喜んだ」（Stalford 2013, 312）。

そして、制御不可能だったGemütsbewegungに対してGefühlは制御可能だ。とにかく全部ダメだという抑圧・圧殺ではなく、良いものは良い程度に受け入れ、適度に我慢し、やっかいなものは振り払うという制御だ。カントや次の世代の人々は、一定の感情を無駄に引き起こすような状況をコントロールできれば感情は制御できるし、思考によっても制御できる（ふさぎ込む時は数学の問題を解こう！）し、身体姿勢も感情制御に役立つ、と考える（Stalford 2013, 317–329）。それが19世紀の市民社会のマナーになっていく（Stalford 2013, 329–339）。これがシタールフォルトの言う「Gefühlの考案」ということになる。

27) このように大事なAffektという概念を何故か『カント事典』では項目化していない（有福・坂部 1997）。

第6節 19世紀の感情用語

第6節第1項 19世紀初頭のドイツ語感情用語の構造

シタールフォルトは膨大なドイツ語による感情論を調べ、簡単にまとめている。本節ではそれを紹介しよう。最初は感情品目の構造だ。まず人間は身体と精神 (Geist) の組み合わせであり、そこから感情も身体的=動物的=感覚器的 (sinnlich) な感情と精神的=「神的」=知的な感情という2つの極がある。ところがこれらは連続的なスペクトルを成して、或る感情品目は或る程度精神的であり或る程度身体的となる。この身体的感情の中に空腹や渇きといったものが入り、精神的なものを突き詰めて形而上学的な感情となると崇高さや真理感情などが入るので、日本語で言う感情とは覆う範囲が異なる (Stalford 2013, 386-390)。

次に感情族の構造だ。カント以降、Gemütsbewegungは役割を弱め、Gefühl, Affekt, Leidenschaftが主要な感情族用語として残った²⁸⁾。それらがどのような相互関係にあるのかについて、当然ながら一致した見解があったわけではない (前節でのカントの分類は一例に過ぎない)。シタールフォルトは複数の著者の感情品目をピックアップして、それが著者毎にGefühl, Affekt, Leidenschaftのいずれに区分されるかを調べた (他の感情族用語を挙げている場合は適宜読み替えた場合もある)²⁹⁾。シタールフォルトは75の感情品目を挙げて、それぞれがGefühl, Affekt, Leidenschaftとカウントさ

28) とはいえGemütsbewegungが消え去ったわけではない。デンマークの内科医Carl Georg Lange (1834-1900) が書いた、まさにジェイムズ=ランゲ理論の一翼を構成する論文のドイツ語の表題は*Ueber Gemütsbewegungen: Eine psychophysiologische Studie* (オリジナルのデンマーク語版は1885年刊行)であった。この著作はHans Kurellaによって1887年にドイツ語訳され出版されている。世に知られるようになったのはこのドイツ語訳からである。Gemütという語自体はポジティブな感情を表す用語として、さらには翻訳不可能な (とドイツ人が考えたがる) 〈ドイツ的心〉を表す語として生き残る (Frevert 2014, 26-27)。

29) この表はあまり適切でなく、後に述べる重複する場合に、どう重複していたのかが分からなくなっている。

れた数を表にしている。そのうちGefühlのみが20, GefühlとAffektの重複が19, Leidenschaftのみが8, GefühlとLeidenschaftの重複が10, 3つの感情族全てにカウントされたものが10あった (Stalford 2013, 400-403)³⁰⁾。Affekt単独のもの, AffektとLeidenschaftの両方のみに (Gefühl抜きで) カウントされたものについては言及がないのでおそらく無かったのだろう。この数値から見れば, AffektはGefühlの真部分集合であり, LeidenschaftはGefühl・Affektの集合と一部を共有した集合ということになる (図3)。

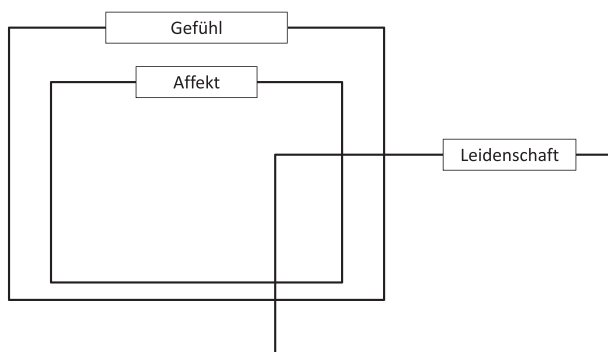


図3 シタールフォルトの感情族分類 (Stalford 2013 より作成)

シタールフォルトがいくつかの感情品目を例としてまとめるところによれば, だいたいの場合GefühlとLeidenschaftは区別される感情族となり, Gefühlのみのものは身体感覚的なもの (快・不快のような), AffektはGefühlに由来する突発的で一時的なもので身体表出を伴い, Leidenschaftは持続的で多くの場合望ましくない結果をもたらすものと把握されていたようだ (Stalford 2013, 403)。

第6節第2項 19世紀後半の日独感情族用語の対応

最後に再び吉野による明治初期の感情族用語の日本語訳に戻ろう。吉野は

30) 全部で75にはならないが, この表を見ただけではその齟齬の理由はわからない。

ドイツ語の訳として1873-1887年の5つの辞書から4つの感情族用語 *Leidenschaft*, *Gefühl*, *Gesinnung*, *Pathos*を選び出した。*Affekt*は無い。馴染みのない*Gesinnung*は今日では「心的態度、見解」などを意味する言葉で、吉野がどうしてこれを感情族用語と見なしたかは不明だ。*Pathos*は基本的に精神医学の文脈で出てくる用語なのでここでは取り上げない。*Leidenschaft*は「情」「感情」「激情」など、*Gefühl*は「知覚」「感触」「感覚」とこの語の原義が主で、「感情」は最後に来る。明治初期のドイツ語辞典ではまだ18世紀的な感覚が残っていたのだろう。

これが、ヴントの心理学の導入の段階で変化する。19世紀末に日本にヴントを紹介した東京帝国大学文科大学の心理学教授である元良勇次郎(1858-1912)とその弟子の中島泰藏(1867-1919)の『ヴント心理学概論』(初版は1898-1899年)と須藤新吉(1881-1961)の『ヴントの心理学』(初版は1915年)での感情族用語とその日本語訳を見てみよう(元良・中島2015; 須藤1921)。両者を対比させた便利な表がある(元良・中島2015, 317-335)。それによると、*Affekt* (*Affect*)は「情緒」、*Gefühl*は「感情」、*Leidenschaft*と*Passion*あるいは*Pathos*は無し、ということで両者が共通している。ヴントにおいてはついに*Leidenschaft*も学術用語としての感情族用語から落ちてしまったのである。ちなみにヴントの英語訳では*Affekt*が *emotion*, *Gefühl*は *feelings* (なぜか複数形だ)となる。英語の *emotion* の今日的な意味を考えれば、この対応は妥当である、と本論文の経緯から判断できる。ならば、19世紀のドイツ語 *Affekt* は「情動」に対応できそうだ。*Gefühl*は消去法で「感情」、*Leidenschaft*は従来通り「情念」としても問題ないだろう³¹⁾。

31) 感情用語が翻訳によって変質を被ることとそれがしばしば無視されがちだということについての重要な指摘を心理学史研究者Claudia Wassmannが行っている(Wassmann 2017)。ヴァスマン自身、ドイツ語を母語として、シカゴ大学でドイツのヴントのフランスとアメリカの心理学への影響を調べた英語の学位論文を書き、現在はスペインのバスク語圏に隣接するナバーラ大学に在籍しているという、翻訳の問題を真剣に考えることのできる立場にいる。

第7節 まとめ

この論文では、歴史研究のために感情用語の整理を行った。感情に関する今日の我々が考えるようなことを最大限含む包括語としての「感情」、感情用語の品目用語と族用語の区別、および感情という用語の日本語としての歴史を二次文献を利用して簡単に振り返った。さらにドイツ語における感情の包括語が18世紀から19世紀にかけて変化したこと、すなわち Gemütsbewegung (Gemüthsbewegung) から Gefühl へ変化したこと、および感情族用語としての Affect (Affekt) と Leidenschaft の役割についても先行研究から判明した。その結果、19世紀ドイツ語の Gefühl に対しては「感情」、Affect に対しては「情動」、Leidenschaft に対しては「情念」の語を対応させても良いだろう、と私は判断した。なお、個々の感情品目用語に対しての日本語での用語との対応はこの論文では扱わなかった。

参考文献

- 有福孝岳・坂部恵編 1997, 『カント事典』 東京：弘文堂
- Cohen, Alix (ed.) 2014, *Kant on emotion and value*. New York: Palgrave Macmillan
- ダマシオ, アントニオ・R. 2010, (田中三彦訳) 『デカルトの誤り 情動, 理性, 人間の脳』 東京：筑摩書房 (Antonio R. Damasio, *Descartes' Error: Emotion, reason and the human brain* の第2版 (2006) の訳)
- ダマシオ, アントニオ・R. 2013, (山形浩生訳) 『自己が心にやってくる 意識ある脳の構築』 東京：早川書房 (Antonio R. Damasio, *Self comes to mind: Constructing the conscious brain* (2010) の訳)
- Deimling, Wiebke 2014, "Kant's pragmatic concept of emotions", in Cohen (ed.) 2014, 108–125
- Dixon, Thomas 2003, *From passions to emotions: The creation of a secular psychological category*. Cambridge: Cambridge University Press
- Dixon, Thomas 2012, "Emotion: The history of a keyword in crisis", *Emotion Review*,

4 (4): 338-344

Frevert, Ute, et al. 2014, *Emotional lexicons: Continuity and change in the vocabulary of feeling 1700-2000*. Oxford: Oxford University Press

Frevert, Ute 2014, "Defining emotions: Concepts and debates over three centuries", in Frevert et al. 2014, 1-31

本間栄男 2013a, 「アレグザンダ・ペインの感情論の構成」, 『桃山学院大学国際文化論集』, n. 47 : 93-137

本間栄男 2013b, 「アレグザンダ・ペインの感情論 (1) 『感情と意志』初版と第2版」, 『桃山学院大学人間科学』, n. 44 : 97-145

本間栄男 2015a, 「ハーバート・スペンサーの感情論」, 『桃山学院大学社会学論集』, 48 (2) : 63-104

本間栄男 2015b, 「アレグザンダ・ペインの感情論 (2) 『感情と意志』第3版」, 『桃山学院大学人間文化研究』, n. 2 : 31-59

カント, イマヌエル 8, (牧野英二訳) 『カント全集 8 判断力批判 上』 東京: 岩波書店 1999

カント, イマヌエル 15, (渋谷浩美・高橋克也訳) 『カント全集 15 人間学』 東京: 岩波書店 2003

カント, イマヌエル 19, (八幡英幸・氷見潔訳) 『カント全集 19 講義録I』 東京: 岩波書店 2002

松山義則 1993-1994, 「感情心理学研究の刊行を迎えて」, 『感情心理学研究』, 1 (1) : 1-2

Mayer, Verena 2012, "Gefühl ist alles!: Zur semantischen Genese einer Erfahrungskategorie", in Sabrina Ebbersmeyer(ed.), *Emotional minds: The passions and the limits of pure inquiry in early modern philosophy* (Berline: De Gruyter), 291-310

元良勇次郎・中島泰蔵 2015, (大山正監修) 『元良勇次郎著作集第8巻 「ヴント氏心理学概論」訂正再版』 東京: クレス出版

Scheer, Monique 2014, "Topographies of emotion", in Frevert et al. 2014, 32-61

Sorensen, Kelly 2002, "Kant's taxonomy of the emotions", *Kantian Studies*, 6 : 109-128

Stalfort, Jutta 2013, *Die Erfindung der Gefühle: Eine Studie über den historischen Wandel menschlicher Emotionalität (1750-1850)*. Bielefeld: Transcript

- 須藤新吉 1921, 『訂正四版 ヴントの心理学』 東京：内田老鶴圃（初版は1915年）
- 鈴木直人 2015 「感情心理学会設立秘話 松山義則先生・濱治世先生をめぐって」, 『感情心理学研究』, **22 (3)** : 150-152
- Wassmann, Claudia 2017, "Forgotten origins, occluded meanings: Translation of emotion terms", *Emotion Review*, **9 (2)** : 163-171
- Williamson, Diane 2015, *Kant's theory of emotion: Emotional universalism*. New York: Palgrave Macmillan
- 吉野寛治 1975, 「ことばとしての感情」, 金子武蔵編『感情』（東京：理想社）, 13-46

On Japanese and German terms of emotions and their taxonomy

HONMA Eio

In this paper I aim to classify Japanese and German emotion terms for historical study. I divide the emotion terms in class terms and repertory terms. I use “*Kanjou* (感情)” as the most comprehensive class term of what we think about emotions and affective states, and I survey its history in Japan using a secondary material. Next, I make it clear that the German emotion class terms had changed between eighteenth and nineteenth century, from *Gemütsbewegung* (*Gemüthsbewegung*) to *Gefühl*, and that the function of the sub-class terms such as *Affect* (*Affekt*) and *Leidenschaft* also had changed. As a result, I decide to use *Kanjou* for the nineteenth century German *Gefühl*, *Joudou* (情動) for *Affekt*, *Jounen* (情念) for *Leidenschaft*.

Keywords : emotion, Gefühl, Gemütsbewegung (*Gemüthsbewegung*), Affekt (Affect), Leidenschaft